

過去の災害を我が事とせよ

(柳田邦夫、「想定外」の罨、東京、文藝春秋社、2011、p. 229-235)

2019年3月8日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1993年6月23日長崎県雲仙普賢岳の噴火活動、同年7月12日北海道南西沖地震(マグニチュード7.8)、同年8月6日鹿児島県前線豪雨、同年8月27日関東地方台風災害、同年9月3日鹿児島県薩摩半島から上陸した台風災害。わずか3か月ほどの期間にこれほど多様な災害が相次いで発生したことは、災害大国日本と呼ばれるに値すると言える。しかし、どの災害も現場は違うにせよ、起こり方のパターンは過去に別の場所で起きたことのある典型的なものであった。噴火活動による大火砕流が集落を焼き尽くし、大地震の発生は津波、火災、崖崩れといった複合災害を後発し、豪雨は崖崩れや土石流を招く。このように、何度も同じパターンの災害が起こっているにもかかわらず、過去の教訓を生かしきれず災害を繰り返しているのはなぜだろうか。

1923年の関東大震災を契機とした崖崩れ東海道根府川駅の惨事と1968年の豪雨による飛騨川バス転落事故は、契機となった災害も違えば、転落したのも鉄道とバスというように異なる災害である。しかし、崖崩れや土石流の危険のある急斜面の下を通る鉄道や道路の防災対策には、地震でも豪雨でも共通するものがある。山国である日本では、山際でしかも片側が海や川という地形を走行する鉄道や道路は至る所に存在し、また、豪雨にさらされることも多い。前述の災害は、同じような災害が全国のどこにでも起きる可能性があり、最悪の場合にどういう事態が起こるかを示している。飛騨川バス転落災害以降、建設省は崖崩れの危険のある国道については、一定の雨量に応じて通行規制をかけるようにし、自治体もそれに準じて通行規制を行っている。しかし、冒頭の鹿児島豪雨では前日からかなりの雨が降り続いていたにもかかわらず、通行規制が行われていなかった。雨量が規制基準に達していなかったためではあるが、従来の規制基準が十分でないことを証明している。このように、災害を過去のものだとか地形も状況も違うだとか、他人事扱いせずに、自分の地域ではどういう条件が重なるとそういった事態が起こりうるかという発想で、さらに適正な対策を練っていくことが肝要である。

見直すべきは国の施策だけではない。北海道南西沖地震の時、奥尻島は震源地から近かったためわずか5分後に津波の第1波が襲来し、ほとんど反射的に高台に逃げない限り助

からなかったという。それでも住民たちが過去の経験を生かして避難の習慣を身につけていれば結果は違っただろう。

昨年も夏から秋にかけて災害が相次いだ年であった。先月、地域医療の一環として西予市野村病院で実習させていただいた。野村町は昨年夏の大豪雨災害で川の氾濫により多くの地域が浸水や崖崩れ、土石流の被害を被った町である。野村病院の先生方や患者さんたちに災害の時の状況を尋ねると、何人もが「まさか自分の町で災害が起こると思わなかった」とおっしゃっていた。中には川の氾濫後も、避難すらしようとしない住民もいたという。そうした危機感の薄れが災害被害を助長してしまったように思う。また、災害時の道路封鎖やライフラインの障害もあり、災害時マニュアルや訓練は行っていたが、パニックは避けきれず身の振り方に戸惑った住民も多かったようである。私もニュースで災害が報道されるたびに、どこか自分の住んでいる地域とは切り離して考えてしまっていた。そういった発想を今改めるべきだと痛感した経験であった。

災害大国日本の住民として被害を最小限に抑えるために、我々は過去の多数の災害を自分と結び付けて考えることが最初の一步として必要である。ドキュメンタリーや体験者の話などがより現実的で良いだろう。それらを踏まえたうえで、国は災害時の規制見直しや整備、鉄道会社は早めの運転見合わせ対策、住民は災害時の避難対策や危機感を持ち直すことなど、それぞれがいずれ来る災害に備えなくてはならない。